The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清華簡『耆夜』の文献的性格
Author(s)	竹田, 健二
Citation	中国研究集刊. 2011, 53, p. 199-212
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　崐号（総五十三号）平成二十三年六月　一九九―二一二頁

清華簡『耆夜』の文献的性格

竹田健二

はじめに

二〇〇八年に清華大学が収蔵した戦国時代の竹簡（以下、清華簡と略記する）は、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』（中西書局、二〇一〇年十二月）の刊行により、その中の九つの文献の写真・釈文等が正式に公開された。

清華簡に関する情報は、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』の刊行前から関係者によって発信され、既に検討が始められている(注1)。しかし、竹簡の写真等の詳細な情報が得られないうちは、研究を進める上で極めて不都合であった。今回、竹簡の写真・釈文等の正式な公開が開始されたことにより、ようやく清華簡の研究に着手できる段階になった。

本稿では、公表された九つの文献の一つである古佚文献『耆夜』について、書誌的な情報を確認するとともに、その全文の釈文を示し、あわせてその文献的性格についての初歩的な検討を加える。

一、『耆夜』の書誌的な情報

本章では、清華簡『耆夜』に関する書誌的な情報を中心として、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』における『耆夜』の【説明】・【釈文】・【注釈】等の記述に基づきつつ、更に筆者が写真等を検討して確認した情報をまとめて示すことにする。

・釈読を担当したのは趙平安氏。

・竹簡枚数…14枚。

・簡長…【説明】によれば45㎝。『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』の巻末に収められている「竹簡信息表」（竹簡

情報の一覧表）によれば、残欠のない完簡の簡長は45.0～45.2cm。

・編綫…【説明】には言及が無いが、「竹簡信息表」によれば三道。写真からも、契口及び編縄の痕跡から、三道が確認できる。但し、各簡の契口はさほど明確ではない。

・簡端…平斉。

・残簡…【説明】によれば14枚のうち4枚。しかしながら、写真から判断するに、第9・10・11・13・14簡の5枚に竹簡の残欠、及びそれに伴う文字の残欠が認められる。第6簡も下端部分に残欠があるが、文字の残欠はない。「竹簡信息表」によれば、残欠のまったくない完簡は第4・7・8簡のみで、他の竹簡は、断裂した竹簡を接合して復原した、所謂整簡である。

・字数…【説明】によれば各簡27字～31字。写真から確認した字数は、左表の通り。なお、表中の「文字数」欄は、竹簡上に認められる文字のみの数であり、残欠した部分に記されていたと推定される文字、及び重文を含んでいない。「＋重文」欄は、重文符号に従って補うことになる文字数を示す。ちなみに、残欠のない完簡である第4・7・8簡の字数は、それぞれ25・27・28字である。

簡	文字数	＋重文
1	28	
2	26	
3	27	5
4	25	1
5	28	2
6	26	3
7	27	1
8	28	5
9	24	
10	28	2
11	22	1
12	27	
13	18	
14	19	

・14簡全ての背面に、ノンブルに当たる竹簡番号（「一」～「一四」）が記されている。このため、竹簡の配列に関しては、趙平安氏の原釈文の配列以外には考えられない。

・第14簡の文字列（末尾に重文符号あり）は竹簡の下端近くまであるが、一字分の留白が存在する可能性が高い。文字列の末尾に墨鉤等の記号は記されていないが、留白が存在すると見られることから、第14簡が文献全体の末尾であることは確実と考えられる。

・篇題…第14簡の背面（竹簡番号の下）に「郢夜」と記されており、篇題と見られる。

二、『耆夜』の解釈

『耆夜』の内容は、概ね以下の通りである。

武王の即位後八年、周は耆を征伐して勝利を収めた。武王とその臣下らは都に帰還し、文王の太室において飲至の儀礼を行った。儀礼の席上、武王は儀礼の宴席における「客」である畢公と、「主」である周公旦とに対して、それぞれ酒を勧めて歌を作った。続いて周公旦が、畢公と武王とに対して、それぞれ酒を勧めて歌を作った。周公旦は更に、「蟋蟀」と題する歌を作った。

こうした内容から判断して、『耆夜』は以下の六つの節に区分することができる。

（一）全体の設定についての説明。

（二）武王が、飲至の儀礼の「客」である畢公に対して、爵に満たした酒を勧めて、「楽楽旨酒」と題する歌を作った場面。

（三）武王が、飲至の儀礼の「主」である周公旦に対して、爵に満たした酒を勧めて、「輶乗」と題する歌を作った場面。

（四）飲至の儀礼の「主」である周公旦が、畢公に対して、爵に満たした酒を勧めて、「央央」と題する歌を作った場面。

（五）周公旦が武王に対して、爵に満たした酒を勧めて、「明明上帝」と題する歌を作った場面。

（六）周公が「蟋蟀」と題する歌を作った場面。

本章では、『耆夜』を右の六つの節に区分して、それぞれ本文・書き下し文・現代語訳を示す。なお、本文中、重文符号については文字に置き換えて示した。また漢字の表記は、可能な限り通行の字体に改めた。隷定・釈読については、基本的に『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』所収の【釈文】に基づくが、復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会等によりホームページ上に発表された各種札記の類等に示された諸説を参考にし、私見も交えて修正を加えた(注2)。

第一節

【本文】武王八年、征伐耆、大戡之。還、乃飲至于文太室。畢公高爲客、召公保奭爲【01】夾、周公叔旦爲主、辛公詎甲爲涖、作策逸爲東堂之客、呂尚父命爲【02】司正、監飲酒。

【書き下し文】武王八年、耆を征伐し、大いに之に戡つ。還りて、乃ち文の太室に飲至す。畢公高　客と為り、召公保奭　夾と為り、周公叔旦　主と為り、辛公詎甲　涖

と為り、作策逸」東堂の客と為り、呂尚父　命もて司正と為り、飲酒を監る。

【現代語訳】武王が即位して八年、周は耆を征伐し、大いに勝利を収めた。武王は都に帰還し、文王の廟において凱旋の宴会を開催した。宴席において、畢公高は客人となり、召公保奭は客の介添え役となり、周公叔旦は主人となり、辛公詎甲は涖（立ち会い役）となり、作策逸は東堂（東側のわきや）の客となり、呂尚父は命ぜられて司正（宴席の進行役）となり、飲酒の儀礼全体を監督した。

第二節

【本文】王舍爵酬畢公、作歌一終、曰「楽楽旨酒」。「楽楽旨酒、宴以二公。恁仁兄弟、【03】庶民和同。方荘方武、穆穆克邦。嘉爵速飲、後爵乃從。」

【書き下し文】王　爵を舎きて畢公に酬め、歌一終を作りて、「楽楽旨酒」と曰う。「楽楽たる旨酒、宴するに二公を以てす。恁仁たる兄弟ありて、庶民和同す。方に荘にして方に武、穆穆として邦を克む。嘉爵あり速やかに飲め。後爵　乃ち従はん」と。

【現代語訳】武王は酒を満たした爵を畢公にすすめて、歌を一つ作った。その題を「楽楽旨酒（楽楽たる旨酒）」という。「楽しき旨き酒がある、この宴は二公（＝畢公・周公）のためのものである。誠実で愛情に富む我が兄弟の活躍があり、（そのおかげで）民は和らぎ調和している。（二人の戦場での活躍は）ともにさかんでたけだけしく、その領内の統治はおだやかでうるわしい。この爵を干しなさい。（そうすれば皆が）続いて干すであろう。」

第三節

【本文】王舍爵酬周公、【04】作歌一終、曰「輶乗」。「輶乗既飭、人服余不胄。叔士奮刃、緊民之秀。方荘方武、克燮【05】仇讎。嘉爵速飲、後爵乃復。」

【書き下し文】王　爵を舎きて周公に酬め、歌一終を作りて、「輶乗」と曰う。「輶乗既に飭い、人　余の胄せざるに服う。叔に士は刃を奮い、緊れ民は之れ秀る。方に荘にして方に武、仇讎を克燮む。嘉爵あり速やかに飲め。後爵　乃ち復せん」と。

【現代語訳】武王は酒を満たした爵を周公にすすめて、歌を一つ作った。その題を「輶乗」という。「軽車（の出撃の準備）が整い、私がまだ兜をかぶらないうちに、臣下たちは私に従った。士たちは刃を振るって勇敢に戦い、（その奮戦の結果）民はさかえる。（士の活躍は）さかんでたけだけしく、敵を打ち倒した。この爵を干しなさい。

更に続けて干しなさい。」

第四節

【本文】周公舍爵酬畢公、作歌一終、曰「央央」。「央央戎服□、莊【06】武赳赳。毖精謀猷□、裕德乃求□。王有旨酒、我憂以浮□、既卒又侑、明日勿慆□。」

【書き下し文】周公　爵を舍きて畢公に酬め、歌一終を作りて、「央央」と曰う。「央央たる戎服、莊武にして赳赳たり。毖みて謀猷を精にし、裕德乃ち求む。王に旨酒有り、我が憂い以て浮ぎん。既に卒えれば又た侑めん、明日慆ること勿からん」と。

【現代語訳】周公は酒を満たした爵を畢公にすすめ、あわせて歌をつくって贈った。その題を「央央」という。「（畢公は）色鮮やかな軍装に身を包み、たけだけしく戦った。謹んではかりごとを巧みにし、立派な成果を得た。この宴に王は旨酒をお持ちになった。ここに（これまでの）私の憂いは過ぎ去ることであろう。（畢公よ）既にさかずきを干したのであれば、更に酒を勧めよう、（あなたならば）明日乱れることはないだろうから。」

第五節

【本文】周【07】公又舍爵酬王、作祝誦一終、曰明明上帝。「明明上帝、臨下之光、丕顯來格□、歆厥禋盟。於【08】……月有盈缺□、歲有歇行、作茲祝誦、萬壽亡疆□。」

【書き下し文】周公又た爵を舍きて王に酬め、祝誦一終を作りて、「明明上帝」と曰う。「明明たる上帝、下に臨むの光、丕顯して来格し、厥の禋盟を歆ぶ。…に於て……月に盈缺有り、歲に歇行有り、茲の祝誦を作る。萬壽疆り亡からん。」

【現代語訳】周公は酒を満たした爵を武王にすすめ、あわせて言祝ぎの歌をつくって贈った。その題を「明明上帝（明明たる上帝）」という。「明明たる上帝が下々を照らす光は、明らかに我々のもとに至っている、（これは武王が上帝に対する）祭祀を行うことを（上帝が）喜んでおられることを示している。…月の運行には（一定の周期で）満ち欠けがあり、木星の運行には（一定の周期で）見かけの逆行がある。ここにこの言祝ぎの歌を作る。武王の寿命が永遠でありますように。」

第六節

【本文】周公秉爵未飲、蟋蟀【09】躍陞于堂、［周］公作歌一終、曰蟋蟀。「蟋蟀在堂、役車其行□、今夫君子、不喜不樂。夫日【10】□□、□□□荒□、毋已大樂、則終以康、康樂而毋荒、寔惟良士之方方。蟋蟀在【11】席□、歲

聿云暮、今夫君子、不喜不樂。日月其邁、從朝及夕、毋已大康、則終【12】以祚。康樂而毋荒、寔惟良士之瞿瞿。蟋蟀在序、歲聿云暮、今夫君子、不喜不樂、【13】□□□□、〔從冬及夏〕。毋已大康、則終以瞿。康樂而毋荒、寔惟良士之瞿瞿。」【14】

【書き下し文】周公　爵を秉るも未だ飲せざるに、蟋蟀躍びて堂に陞り、周公　歌一終を作りて、『蟋蟀』と曰う。「蟋蟀　堂に在り、役車其れ行く、今夫れ君子、喜ばざれば楽しまず。夫れ日□□、□□□荒、已大だ楽しむこと毋ければ、則ち終に以て康たり。康楽にして荒むこと毋かれ、寔に惟れ良士は之れ方方たり。蟋蟀　席に在り、歲聿に云に暮る、今夫れ君子、喜ばざれば楽しまず。日月其れ邁き、朝従り夕に及ぶ、已大だ康んずること毋ければ、則ち終に以て祚あり。康楽にして荒むこと毋かれ、寔に惟れ良士は之れ瞿瞿たり。蟋蟀　序に在り、歲聿に云に暮る、今夫れ君子、喜ばざれば楽しまず。□□□□、〔冬従り夏に及ぶ。〕已大だ康んずること毋ければ、則ち終に以て瞿たり。康楽にして荒むこと毋かれ、寔に惟れ良士は之れ瞿瞿たり。」

【現代語訳】周公が爵を手にしながらまだ酒を飲んでいない時に、蟋蟀が跳んで堂の上に昇ってきた。周公はそれを見て歌をつくった。その題を『蟋蟀（こおろぎ）』という。「蟋蟀が堂の上にいる。（堂の前を）軍役の車両が進んでいく。君子は戦勝を喜ばなければ楽しまない（戦勝の宴では喜んでこそ君子である）。…楽しむことが度を過ぎてなければ、最後まで安んじていられる。歓楽の度が過ぎて乱れてはならない、本当に良い士というものはまっすぐで正しいものである。蟋蟀が座席の上にいる。木星が（時間がたったために）位置を変えた。君子は戦勝を喜ばなければ楽しまない。日月は（一定の規則に従って）運行し、いつも朝が来てから夕べになる。あまりに安心し過ぎなければ、最後に福がある。歓楽の度が過ぎて乱れてはならない、本当に良い士は注意深いものである。蟋蟀が堂の前のひさしのある牆のところにいる。木星が（時間がたったために）位置を変えた。君子は戦勝を喜ばなければ楽しまない。…〔冬が来て夏が来る。〕安心し過ぎることがなければ、最後まで用心深さを保てる。歓楽の度が過ぎて乱れてはならない、本当に良い士は注意深いものである。」

三、『耆夜』の構成と文献的性格

本章では、『耆夜』の文献的性格について、現段階としての初歩的な検討を行う。

先ず確認しておきたいのは、検討の前提となる、清華簡の年代である。清華簡は、盗掘により出土したものであるため、その出土時期や出土地点が不明であり、また竹簡が副葬されていた墓そのものや他の副葬品に関する情報が一切ない。このことは、その中に含まれている文献の書写時期や成立時期等を検討する上で、大きな問題とならざるを得ない。

しかし、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』「前言」に記されているように、清華簡は二〇〇八年十月十四日、清華大学の要請に応じた中国を代表する十一人の専門家によって鑑定され、その結果「戦国中晩期」の貴重な文献であると判定された。

また二〇〇八年十二月には、清華大学の委託を受けた北京大学加速器質譜実験室と第四紀年代測定実験室とにより、文字の記されていない竹簡の残片を用いたＡＭＳ法による炭素十四年代測定が行われた。その結果、紀元前三〇五±三〇年との数値が得られ、専門家らによる判定が裏付けられている。清華簡が「戦国中晩期」の文献であるという点については、現時点において、それを覆すに足るだけの信頼できる判断材料はない。

およそ古代中国において、或る文献の原本が成立した後、書写が重ねられて広く流布するためには、或る程度の時間が必要であったと考えられる。このため、「戦国中晩期」の清華簡に含まれる文献の原本の成立時期は、戦国時代初期以前にまで遡る可能性が高く、『耆夜』の成立時期も戦国初期以前と考えられる。このことが、『耆夜』の文献的性格を検討するにあたっての前提となる。

加えて念頭に置かなければならないことは、『耆夜』の内容とその文献としての成立時期との関係である。前章で検討した通り、『耆夜』の内容は、武王が即位して八年後の出来事との設定になっている。もとより、設定がそのようになっているということから、この文献の成立時期を武王八年の直後、もしくはそれに近い時期と判断することはできない。そうした可能性を一概に否定することはできないが、内容上の設定とその文献の成立との間にかなり時間差があることも当然あり得る。

そもそも『耆夜』に記されている武王八年後の出来事が、武王の時代に実際にあった出来事であるかどうかは定かではない。もちろん、内容が史実に近いものである可能性を一概には否定することはできないが、史実とは直接には関係がなく、後世の仮託であるとの可能性も十分考えられる。また、仮にその文献の成立時期が内容の設定されている時期よりもかなり遅れるとしても、記述されている内容そのものは古い出来事をかなり忠実に記

録している、ということもあり得る。

以上のことを踏まえつつ『耆夜』の文献的性格を考えるならば、現時点においてどのようなことが考えられるのであろうか。

先ず第一に注目すべき点は、『耆夜』は、武王が耆への遠征で勝利した後に行った飲至の儀礼の際の情景を描いている文献として、全体的にまとまりを有しており、体裁が整っていることである。もとより『耆夜』の釈読に関しては、なお問題の残る部分もある。しかし、文献全体として見るならば、形式上も内容上も、『耆夜』には一応の完結性が認められるように見受けられる。

すなわち、先述の通り『耆夜』の竹簡には、各簡とも背面にノンブルに当たる竹簡番号が記されている。このため、その配列は原釈文以外に考えられないのだが、最終簡である第14簡の下端には一字分の留白が存在する可能性が高いと見られる。この留白は、第14簡が更に他の竹簡と連続する可能性のないことを示し、従って『耆夜』は、形式上十四枚の竹簡で一つの文献として独立していると考えられる。

また内容についても、先述の通り、第一節で全体の設定が説明された後、第二節から第六節に至るまで、時間の経緯に添って飲至の儀礼での出来事が描かれていると見て問題がない。また詳しくは後述するように、『耆夜』は、周公旦を中心に飲至の儀礼の情景を描くものとして構成された文献であると考えられる。そしてその叙述も、特に武王と周公旦が畢公・周公旦・武王に酒を勧めて歌を作ることを述べた第二節から第四節にかけて、句形がよく揃っている。

こうしたことから、『耆夜』は全体として体裁の整った、まとまった文献であるように見受けられる。

第二には、古佚文献である『耆夜』の内容は、伝世文献の記述とほとんど重ならないことである。

この点について『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』中の『耆夜』の【注釈】〔一〕は、『書経』商書の「西伯戡黎」や『尚書大伝』、及び『史記』周本紀が、「黎」、つまり耆を征伐して勝利した人物を西伯、すなわち文王としていることを指摘し、既に宋代の胡宏や薛季宣から清代の梁玉縄に至るまでの多くの学者が、文王では当時の情勢に合致しないと指摘していると述べ、清華簡『耆夜』の文章はそうした疑いを証明したとしている。しかし、文王が耆を伐ったとする『書経』商書の「西伯戡黎」、『尚書大伝』、『史記』周本紀にしても、耆を征伐した後に行った飲至の儀礼についての記述はまったくない(注3)。

僅かに、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』中の【説明】も

指摘するように、『耆夜』において周公旦が作った歌として登場する「蟋蟀」という名の歌について、『詩経』国風・唐風の「蟋蟀」との間に関連が認められる。もっとも、この二つの歌は、確かに語句の類似するところがあるが、全体として見れば別の歌であって、同一の歌と見なすことはできない(注4)。

『耆夜』の内容が伝世文献の記述とほとんど重ならない点に関して、特に重要と思われるのは『書経』との関係である。もとより、伝世本の『書経』は完本ではないが、『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』「前言」には、『書経』と内容の重複する文献、或いはその体裁が『書経』と類似する文献が清華簡には多数含まれていると述べられている。しかし、『耆夜』について見るならば、内容的に伝世本『書経』と重複するところはほとんどない。先に触れたように、周が耆（黎）を伐って勝利したという点についてのみは、商書「西伯戡黎」と重なると言えるが、『書経』ではそれは武王ではなく文王のこととされている。しかも「西伯戡黎」の内容は祖伊と紂王との対話を中心としており、『耆夜』の内容とはまったく重ならない(注5)。

第三には、『耆夜』の全体としての構成が、武王ではなく周公旦を中心としていることである。

耆に対する戦勝の後、都に帰還して飲至の儀礼を執り行うこと自体は、当然君主たる武王の役目であったに違いない。『耆夜』において、冒頭の全体の設定についての説明（第一節）に続く場面では、武王が先ず「客」である畢公に対して爵の酒を勧めて「楽楽旨酒」の歌を作り（第二節）、次いで武王は「主」である周公に対して爵の酒を勧めて「輶乗」の歌を作っている（第三節）。このように『耆夜』の前半が武王の行動を中心にして描かれているのは、武王が飲至の儀礼を執行する中心人物であったためと見てよかろう。

しかし、『耆夜』において武王が中心的役割を果たしているのはそこまでであり、後半になると周公旦が中心となる。すなわち、周公旦は先ず畢公に対して爵の酒を勧めて「央央」の歌を作り（第四節）、次いで武王に対して爵の酒を勧めて「明明上帝」の歌を作り（第五節）、更に「蟋蟀」の歌を作る。そこで文献全体は終わっている（第六節）。

特に、周公旦が「蟋蟀」の歌を作ったところで文献が終わっている点は重要である。

『耆夜』に記されている五つの歌の中で「蟋蟀」以外の四つの歌は、いずれも戦勝を収めた後に、都に帰還して行われた儀礼の中で歌われるに相応しいものと見てよ

い。すなわち、武王が畢公に贈った「楽楽旨酒」、及び周公旦に贈った「輶乗」、並びに周公旦が畢公に贈った「央央」の主題は、いずれも歌を贈った相手の戦場における活躍を称えるところにあると考えられる。また周公旦が武王に贈った歌「明明上帝」は、竹簡の残欠により不明な箇所もあるが、全体としては武王と上天・上帝との関係が良好であることを言祝ぎ、勝利を収めた武王を称えて、その長寿を祈るところに主題があると思われる。

このように、『耆夜』中の「蟋蟀」以外の歌はいずれも、飲至の儀礼に出席した、耆との戦闘の参加者である周の武王とその臣下らを称えることを主題とする、言祝ぎの歌である。それらは、戦勝後に都で行われた儀礼の中で歌われるに相応しく、おそらくそうした言祝ぎの歌を作るという行為自体が、儀礼そのものに組み込まれていたと考えられよう。

これに対して、周公旦が最後の場面で作った「蟋蟀」は、竹簡の残欠があり意味の把握が難しい箇所があるのだが、他の歌とは大いに異なるところがある。

その一つは、この歌は周公が「爵を秉るも未だ飲せざるに、蟋蟀躍びて堂に陞」ったことをきっかけに、周公が作った歌とされている点である。このことは、「蟋蟀」の歌は、それを作ること自体が飲至の儀礼の中に組み込まれていたのではなく、いわば即興で作られたものであることを意味する。加えて、この歌を贈る相手は特定の誰かに特定されていない。他の歌がその飲至の儀礼の場にいた特定の一人に贈られたものであるのに対して、「蟋蟀」はおそらく儀礼に参加している全員に向けたものであったと考えられる。

更に、「蟋蟀」は言祝ぎの歌ではない。「楽しむ毋かれ」「荒むこと毋かれ」「康んずる毋かれ」の句が繰り返され、更に「良士は之れ方方たり」「良士は之れ瞿瞿たり」といった句があることから明らかなように、「蟋蟀」の歌は、武王を含む儀礼の参加者全員に対して、いつまでも戦勝の喜びに浸るのではなく、今後行動を慎まなければならないと、戒めるところにその主題があると考えられる。

すなわち、『耆夜』は、先ず全体の設定についての説明があり（第一節）、続いて飲至の儀礼の中で武王と周公旦とが作った言祝ぎの歌が続き（第二～五節）、最後に周公旦が参加者全員に向けて戒めの歌を即興で作って終わる（第六節）、との構成になっていると理解できる。こうした構成をとる『耆夜』において、全体として中心的な人物として描かれているのは、その後半の中心人物であり、特に結末の箇所で「蟋蟀」の歌を作り、儀礼に参加する周王室関係者全員に対して訓戒を行っている、周公旦と

理解すべきである(注6)。

以上のように、『耆夜』の文献的性格を考える上での手がかりとして、第一に文献全体としてまとまりがあり、その体裁がよく整っていること、第二にその内容が伝世文献の記述とほとんど重ならないこと、第三に全体が周公旦を中心に構成されていることが注目される。

こうした点を踏まえて『耆夜』の文献的性格を推測するならば、『耆夜』は部分的に古い伝承や記録を踏まえているところがあるとしても、内容上設定されている武王八年の直後、もしくはそれに近い時期に成立した文献であるとは考えがたいと思われる。もとより、『耆夜』の中に、武王が活躍した時代に関する古い記録の類を踏まえた部分が含まれている可能性は否定できない。むしろ、『耆夜』の内容のすべてをまったくの虚構と考えるよりも、その中に何らかの記録や伝承といったものが含まれていると考える方が自然であろう(注7)。

しかし、『耆夜』は文献全体としてよくまとまっており、中でも結末の箇所で周公旦が作る「蟋蟀」の歌は、三連に巧みに構成され、複雑で技巧的と見受けられる。すなわち、「蟋蟀」の中では、蟋蟀が役車や歳星と同じく空間を移動する物体として扱われ、視線の変化や時間の経過が間接的に表現されている。この点は、この歌がかなり複雑で技巧的であることを示し、その成立はそう古くはないと見るのが妥当であるように思われる(注8)。こうしたことから、『耆夜』が最終的に成立した時期としては、春秋時代末から戦国時代初期にかけてと見なしておくのが妥当であろうと考えられる(注9)。

おわりに

『耆夜』の成立した具体的な事情に関しては、さまざまな可能性を考えることはできるものの、その中から蓋然性の高いものを絞り込むことが現時点では極めて困難である(注10)。

『耆夜』の成立の事情の解明は、今後清華簡中の他の文献、及び他の出土文献の研究が進む中で、手がかりとなる新たな知見が得られることが期待され、そうした検討については今後の課題としたい。

注

(1) 李学勤「清華簡《郜夜》」(光明日報 http://www.gmw.cn/content/2009-08/03/content_957854.htm、二〇〇九年八月三日)、李学勤・劉国忠「清華簡与中国古代文明研究」(二〇

一〇年三月二十四日発表、http://www.confucius2000.com/admin/list.asp?id=4348）、沈建華「清華楚簡“武王八年伐邘”争議」（『考古与文物』二〇一〇年第二期）、李学勤・劉国忠「清華簡九篇綜述」（『文物』二〇一〇年第五期）、子居「清華簡九篇九簡解析」（http://www.confucius2000.com/admin/list.asp?id=4481、二〇一〇年六月三〇日発表）、陳致「清華簡所見古飲至礼及《邘夜》中古佚詩試解」（清華大学出土文献研究与保護中心編『出土文献』第一輯、中西書局、二〇一〇年八月）等。

（2）復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会「清華簡《耆夜》研読札記」（http://www.guwenzi.com/SrcShow.asp?Src_ID=1347、二〇一一年一月五日発表）、黄人二、趙思木「読《清華大学蔵戦国竹簡（壹）》書後（一）」（http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1368、二〇一一年一月七日発表）、蘇建洲「《清華簡》考釈四則」（http://www.guwenzi.com/SrcShow.asp?Src_ID=1368、二〇一一年一月九日発表）、米雁「清華簡《耆夜》、《金縢》研読四則」（http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1381、二〇一一年一月一〇日発表）、黄人二、趙思木「読《清華大学蔵戦国竹簡（壹）》書後（四）」（http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1402、二〇一一年二月一七日発表）等。なお、煩雑を避け、一々の注記は省いた。

（3）注1前掲の陳致「清華簡所見古飲至礼及《邘夜》中古佚詩試解」によれば、今本『竹書紀年』にも、武王が耆を征伐したことに関する記事はない。但し、周知の通り現行の『竹書紀年』は完本ではなく、そのことを根拠として『耆夜』の内容について判断することはできない。

（4）『詩経』の「蟋蟀」においては、「蟋蟀在堂（蟋蟀堂に在り）」が同じ句として三回繰り返され、蟋蟀の位置や蟋蟀を見る視線に変化が認められないのに対して、清華簡の「蟋蟀」においては、「蟋蟀在堂（蟋蟀堂に在り）」「蟋蟀在席（蟋蟀席に在り）」「蟋蟀在序（蟋蟀序に在り）」と、詩の中で蟋蟀は、役車や歳星と同じく空間を移動する物体として扱われており、それに伴って蟋蟀を見る視線の変化や時間の経過が間接的に表現されている。こうした違いから、『詩経』の「蟋蟀」よりも清華簡の「蟋蟀」の方が複雑で技巧的であるように見受けられ、清華簡の「蟋蟀」の成立時期は、『詩経』の「蟋蟀」の成立よりも遅れると理解するのが妥当であるように思われる。戦国時代に作られたものと考えられる石鼓文が、『詩経』の詩を踏まえていると見られることを想起するならば、『耆夜』が『詩経』の詩を踏まえて著述された可能性が考えられる。なお注1前掲の子居「清華簡九篇九簡解析」によれば、曹建国は「《論清華簡中的〈蟋蟀〉》」

において、清華簡中の「蟋蟀」は戦国時代の作品であるとしている。更に、曹の見解に対して子居は、「春秋晩期」つまり春秋時代後期の作品であるとしている。但し、これらの見解はいずれも、李学勤・劉国忠「清華簡九篇綜述」(『文物』二〇一〇年第五期所収)を踏まえたものであり、まだ『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』が刊行されていない時点のものである。

(5)『耆夜』が、武王と周公旦が作った五つの「歌」を、それぞれその歌の名とともに記している点について見ても、今本の『書経』にはそうした記述がほとんどない。「金縢」では周公旦が「鴟鴞」という名の「詩」を作ったと記すが、その詩の内容は記されていない。僅かに「五子之歌」には、太康の五人の弟が五つの「歌」を作った背景とその歌の内容とが記されているが、それぞれの歌に付けられた歌の名は特になく、また「五子之歌」は偽古文である。

(6) もっとも、周公旦が作った「蟋蟀」の歌のところで『耆夜』が終わっているのは、この飲至の儀礼における「主」である周公旦が、単に儀礼の「主」となった者の役割として、儀礼の参列者に宴の終わりを告げる歌を作ったに過ぎない、とも考えることができる。そうした可能性も一応は考えられる。

(7) 前述の通り『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』「前言」には、清華簡の中には『書経』と内容の重複する文献、或いはその体裁が『書経』と類似する文献が多数含まれていると指摘する。仮に清華簡全体が所謂『古文尚書』と密接な関係にあるものだとすれば、『耆夜』も周初の出来事を記した一篇として、『尚書』に含まれていたとの可能性もなお残ると思われる。

(8)「蟋蟀」の歌については注4参照。

(9) 小沢賢二氏は、『耆夜』中の「歳」が歳星、つまり木星を指すとすれば、中国人が惑星である「五星」の存在を認識したのは戦国時代に入ってからであるため、『耆夜』は周文王時代の実録ではなくなる」と指摘する。『中国天文学史研究』(汲古書院、二〇一〇年二月)第11章清華大学蔵戦国竹書考5．古天文学からみた「清華簡」参照。

(10) あくまでも一つの可能性としてであるが、『耆夜』は、春秋時代末から戦国時代初期までの間に儒家によって成立した可能性を考えることができる。周知の通り、孔子は周公旦を理想と仰いでいたとされる。このため、孔子が周公旦を理想と仰いだのには然るべき理由が存在したと主張しようと、儒家が周公旦を顕彰するために『耆夜』を著述した可能性があるのではないかと考えられるのである。或いはまた、耆に対する戦勝後に都で行われた飲至の儀礼の場において、武王のいる中で「蟋蟀」の歌を作って儀礼の参加

者に訓戒を垂れる周公旦の姿を、王位にはつかなかった孔子と重ねるところに『耆夜』成立の意図が込められていたとの可能性も、一応は考えることができる。もっとも、『耆夜』の中には、特に儒家との直接的な関連を窺わせる要素を見出しがたく、また周公旦を理想とすることは、必ずしも儒家だけが行っていたとは限らない。『耆夜』の成立と儒家との関係は、現時点で考えられる可能性の一つに過ぎない。なお、仮に『耆夜』が儒家の成立させた文献ではなく、儒家が活動する以前に既に成立していたものであったとするならば、その場合上述したような理由から、儒家が『耆夜』を積極的に受容したとの可能性は十分に考えられる。

［附記］本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究」（研究代表者、湯浅邦弘）による研究成果の一部である。